プレイフル　ナンセンス　コメディ

作　折田

登場人物

キホ　UFOを召喚しようとしている女子中学生。
スイ　UFOを召喚しようとしている女子中学生。
リュウ　UFOを召喚しようとしている男子中学生。
オカマ先生　3人の学校の先生。オカマ。

1

夜の河原。
3人の男女がくるくるまわっている。
どうにもUFO召喚の儀式らしい。

3人　「ルーフル、ルーフル、応答せよ。ルーフル、ルーフル……」

3人、疲れたようにその場に座り込む。しばらく意味のない、呪文のような言葉の羅列が続く。

キホ　「今日もダメっぽい」
スイ　「そうだねえ」
リュウ　「せっかくこれだけ天気良いんだしさ、休憩してからもう1回してみようぜ」
スイ　「そうだねえ」
キホ　「ううん、疲れたし、今日は帰ろう」
スイ　「そうだねえ……ねえ！？」
リュウ　「どっ、どうした。熱でもあるのか」
キホ　「えっ、あ、あるのかな？」
スイ　「体温計、あるよ」
キホ　「ありがと」
リュウ　「なんで持ってる？」
スイ　「（力強く頷く）」
リュウ　「お前それで答えになると思ってんのか」
キホ　「（空を見ていて）あっ」
スイ　「いっ」
リュウ　「う」
キホ　「え？」
スイ　「お」
キホ　「か」
リュウ　「なんで続けんだよ。なんだよ」
キホ　「流れた」
リュウ　「なにが」
スイ　「星？」
キホ　「うん。いや、あれは、UFOかも」
リュウ　「へえ？」
スイ　「えっ、ほんと？」

キホ　「ほんと。（空に）おーい」
スイ　「こっちだよー」
リュウ　「おーい、おーい」
キホ　「あっ、わかった」
スイ　「わかった？（空を見ながら）」
キホ　「ここじゃあ、距離が届かないんだ」
リュウ　「あーね」
キホ　「やっぱり屋上かな」
スイ　「かなあ」
リュウ　「最近じゃどこも施錠されてるけどな」
キホ　「現実の壁は高い」
スイ　「あっ、流れた流れた」
キホ　「どこどこ？」
リュウ　「今日流星群か？」

３人、夜空を眺める。

スイ　「宇宙人って、どんなのかなあ」
リュウ　「やっぱ、こう、自転車でさ……」
キホ　「それモロにE.Tじゃん」
スイ　「どうしよう、私E.Tみたいな宇宙人だったら叫んじゃうかも」
リュウ　「え？　E.T可愛いじゃん」
スイ　「ちょっと分かんないでえす」
キホ　「案外私たちと同じかもね」
スイ　「なにが？」
キホ　「見た目」
リュウ　「まあ、かもなあ。あっちからしたらオレらも宇宙人なわけだし」
スイ　「え？　私たち宇宙人なの？　なんで？」
キホ　「なんでって、そりゃ……うーん？」
リュウ　「改めて説明しようとすると難しいけどさ……」

体温計が鳴る。

キホ　「あ、いけた」
リュウ　「おう。何度」
キホ　「３９度」

スイ　「帰ろー」
リュウ　「高熱」
キホ　「あるねえ」
スイ　「はやく帰ろうよ。リュウ、キホおんぶしたげて」
リュウ　「おお。いいけど（背中を向けて）ん」
キホ　「（乗る）いけ、リュウ2号」
リュウ　「1号は」
スイ　「私だ」
リュウ　「お前だったのか」
キホ　「暇をもて余した」
スイ　「学生の」
3人　「遊び」
リュウ　「怒られるわ」
スイ　「心配ないさ～」
リュウ　「怒られるわ。早く帰るぞ」

3人、笑いながら舞台端に歩いていく。
キホ、リュウ、退場。スイ、舞台に残る。

スイ　「（客席に）実は私はUFOにも宇宙人にも興味がない。ぶっちゃけ宇宙って漢字で書けない。でも3人でバカやってるのが楽しいから、こうやって毎日空に向かってルーフルルーフル叫んでる。だから、宇宙人なんて来なくて良い。ルーフル、ルーフル、応答するな。宇宙人なんて来なくて良い」

スイ、2人を追いかけるように退場。

2　3人、テーブルに街の地図を広げている。放課後の理科準備室。

スイ　「ここのビルって結構前から廃ビルだよね。鍵壊してもバレないんじゃない？」
キホ　「うーん、あ、ダメダメ。表の看板に売却済みってシール貼ってあった」
リュウ　「まじ？　いつ？」
キホ　「確か昨日には」
スイ　「そっか」
リュウ　「このあたりで他に高い建物っつったらここくらいしかねえよ」
キホ　「うん。それ、思ってた」
リュウ　「は？」

キホ　「やっぱ学校だよね」
スイ　「え。えっ、えっ～。侵入しちゃう？　え～」
リュウ　「楽しそうだな」
キホ　「やっぱ……夜だよね」
スイ　「きゃ～」
キホ　「ドキドキするでしょ。ワクワクするでしょ」
スイ　「するするう。ますます惚れちゃう」
キホ　「ふっ。スイの瞳に、乾杯」
スイ　「抱いて」
リュウ　「よそでしてくれ」

理科室の電気がつく。
はっとして3人が振り返るとオカマ先生がいる。
オカマ先生、無言でスタスタと3人に近づく。
威圧。
途端、身体をくねらせ。

オカマ先生　「んも～う。予備の鍵盗んだの、アンタ達でしょ」
リュウ　「とうとうバレたかあ」
キホ　「すみませんでした。でも、これには理由があるんです」
オカマ先生　「理由？」

オカマ先生、真剣な目をしている3人を一瞥する。

オカマ先生　「ま、理由によっちゃ咎めないでおきましょ」
スイ　「はい。UFO を呼ぶためです」
オカマ先生　「校長室へ行きましょ」
リュウ　「待ってください、話し合いましょう」
キホ　「あーん。堪忍してえ」
スイ　「堪忍袋堪忍袋ぉ」
オカマ先生　「緒も切れるわよお馬鹿。ほら、とりあえず鍵返しなさい」
キホ　「私たちの秘密基地……」

といいながらも、素直にポケットから鍵を取り出し、オカマ先生に渡す。

オカマ先生　「秘密でも基地でもないけどね。……UFO って？」

キホ　「え？」
オカマ先生　「ここで呼んでるの？　UFO」
リュウ　「あ、いや。ここでは作戦会議を」
キホ　「河原で円になって呪文を唱えるんです。ルーフル、ルーフル、応答せよって」
オカマ先生　「そうなの。……ふふ、なんだか懐かしいわね」
スイ　「え、もしかしてオカマ先生も？」
オカマ先生　「そうね。……宇宙人を見てみたくてね、同じようなことをしていたわ。いやーん恥ずかしい」
リュウ　「へえ、ちょっと意外っていうか、親近感」
スイ　「うん。ね～」
キホ　「今は？　大人になってからはもうやめたんですか？」
オカマ先生　「そうねえ、実はもう見たのよね」
リュウ　「へ？」
オカマ先生　「んふふ」
キホ　「UFO？」
オカマ先生　「UFO。そうね、宇宙人」
スイ　「え、え～。ほんとにいるんだ」
キホ　「今更何言ってんのよ。どんなの？　どんなのでした？」
オカマ先生　「ナイショ」
スイ　「ケチオカマ」
オカマ先生　「愛の鞭（スイにデコピン）と、飴（キホに鍵を返す）」
キホ　「え、いいんですか？」
オカマ先生　「誰にも言っちゃダメよ。言ったらお嫁にもお婿にも行けない身体にするからね」
リュウ　「教育者の言葉じゃねえ」
キホ　「ありがとうございます」
スイ　「さっきはケチオカマなんて言ってごめんなさい。先生は寛大なオカマです」
リュウ　「よっ、寛大オカマ」
オカマ先生　「うーん、あんまり嬉しくない」

オカマ先生、時計を見る。

オカマ先生　「今日はもう帰んなさい。特にキホ、昨日ようやく熱が下がったんですってね？　あんまり無理しちゃダメよ」
キホ　「はい」
オカマ先生　「今朝アンタんとこの担任が泣いてたわよ。とうとう熱が下がってしまったっ

てね」
スイ　「え……」
リュウ　「ろくな先生いねえなこの学校」
オカマ先生　「アンタ達がろくな生徒じゃないだけでしょうが」

チャイムが鳴る。

オカマ先生　「本格的に時間だわ。今日の見回りは黒縄先生だから、見つかったらタダじゃ済まないわね」
キホ　「うっわ、まじか」
リュウ　「おい、とっととズラかろうぜ」
オカマ先生　「言葉言葉」

3人、慌てて片付けをする。
キホ、スイ、オカマ先生、退場。
リュウ、舞台に残る。

リュウ　「（客席に）実はオレはUFOにも宇宙人にも興味がない。っていうかまず信じてない。でも3人でバカやってるのが楽しいから、こうやって毎日UFO呼び出す方法考えてる。だから、宇宙人なんて一生来なくて良い。ルーフル、ルーフル、応答すんな。宇宙人なんて来なくて良い」

リュウ、3人を追いかけるように退場。

3　放課後の理科準備室。そろそろ夜がやってきそうだ。
足音。3人、机の下（物陰）に潜んでいる。
施錠を確認するように引き戸がガチャ、と鳴り、すぐに足音が遠ざかる。

リュウ　「オーケー」
スイ　「ドキドキしすぎてヤバイ」
キホ　「もうあとには退けないね」
リュウ　「日が落ちるまで2時間くらいか。あ、屋上の鍵、誰が持ってる？」
キホ　「私」
スイ　「2人で苦労して取ってきたんだからあ感謝してよね」
リュウ　「ああ。……そういえば鍵って黒縄先生の机横にかかってるよな。どうやって取ったんだ？」

スイ　「賄賂」
リュウ　「賄賂！？」
キホ　「違う違う。今日の授業でぇ～ここが分からなかったんですけどぉ～って私が質問して」
スイ　「先生が感動のあまり泣いている隙に私がパッと、ね」
リュウ　「普段の不真面目さがここにきて役に立つとは」
キホ　「リュウは？　すっごーいの、持ってきてくれたんでしょ？」
リュウ　「おう、まあな」

リュウ、大きな天体望遠鏡を持ってくる。
キホ、スイ「おお～」と感嘆の声をあげる。

リュウ　「小遣い3ヶ月分だぜ」
キホ　「リュウ、あんた男だねえ～」
スイ　「すご。いつ運んだの？」
リュウ　「朝6時には学校に来たな」
スイ　「その時間って開いてるんだ……」
リュウ　「おう。22時まで夜間警備員が見回ってるだろ。で、朝5時から7時半まで早朝警備員がいるだろ。で、さらに7時にはオカマ先生がきて、その20分後には黒縄先生がくる。だからその前に運んだんだよ」
キホ　「でも警備員さんには会ってないの？」
リュウ　「授業で使うっつった」
キホ　「不審がったろうなあ」
スイ　「リュウ、今日のためににゅう麺に調べたんだね」
キホ　「入念」
リュウ　「入念。ちなみにオカマ先生は朝イチで来てラジオ体操をしたあとに紅茶を飲むのが日課らしい」
キホ　「うわ、どうでも良い」
スイ　「本音出てるよ」
リュウ　「待て」

足音が近づいてきている。3人、慌てて物陰に潜む。
引き戸を引く音。開かない。
鍵を開ける音。扉が開く。
オカマ先生登場。天体望遠鏡を見つける。

オカマ先生　「いるんでしょ？　観念して出てきなさい」

3人、出てこない。

オカマ先生　「これ、持ってっちゃおうかしら」

3人、しぶしぶ出てくる。

オカマ先生　「やっぱりね。全く、何してんのよアンタ達」
スイ　「へへ……」
キホ　「これには理由があるんです」
オカマ先生　「理由？」

オカマ先生、真剣な目をしている3人を一瞥。

オカマ先生　「ま、理由によっちゃ咎めないでおきましょ」
スイ　「はい。UFOを呼ぶためです」
オカマ先生　「校長室へ行きましょ」
リュウ　「おい、このやりとり前にもしたぞ」
オカマ先生　「今日の見回りが私だから良かったけど、いや、良くないけど。こんな時間まで勝手に居残って、親呼ぶレベルの問題よ」
キホ　「親、ですか」
オカマ先生　「ええ。で？　UFOとこれ、何の関係があるのかしら？」
リュウ　「ゲエ……（2人を見て）」
スイ　「親に連絡されるのは困る……（2人を見て）」
キホ　「屋上に入りたかったんです。ごめんなさい」
オカマ先生　「どうりで。鍵がないと思ったのよね」
スイ　「あちゃ……」
オカマ先生　「でも今日の鍵管理は私だから、他の先生は知らないわ」
リュウ　「え」
キホ　「オカマ先生」
オカマ先生　「望遠鏡まで買って、んも～素敵じゃないの。今日はテスト作りで遅くまで残る予定だったしい。問題児たちに付き合っちゃおうかしら」
リュウ　「よっ。寛大オカマ」
キホ　「ありがとうございます」
オカマ先生　「良い女は心も広いのよ」

キホ　「もう超いい女。私が男だったら惚れてる惚れてる」
オカマ先生　「そうでしょ。もっと言ってちょうだい」
スイ　「よ、絶世の美女。テスト出来たら見せてください！」
リュウ　「答えもな！」
オカマ先生　「堂々とカンニングしようとしないでくれるかしら」
キホ　「きゃあ。堪忍して」
スイ　「堪忍袋堪忍袋ぉ」
オカマ先生　「アンタそれ言いたいだけでしょ。（天体望遠鏡を見て）奮発したわね。皆で買ったの？」
リュウ　「いや、オレの小遣い」
オカマ先生　「あらやだ男じゃないの。お婿に行けない身体にしていい？」
スイ・キホ　「どうぞどうぞ」
リュウ　「よくねえ。くっつくな変態」
オカマ先生　「そんなこと言っていいのかしらん。私はいつでもアンタ達の親に連絡出来るのよ」
リュウ　「やり方が汚ねえ」
スイ　「楽しみだね。レジャーシートとかお菓子とか、持って来れば良かったかも」
キホ　「天体観測じゃないんだからさ。あくまでUFOの召喚がメインでしょ？」
スイ　「あ、うん……」
リュウ　「あー、いいんじゃねぇの。せっかくだし、今日は天体観測にしても」
キホ　「屋上なんてそうそう入れないんだよ？　オカマ先生だって、そんな何回も見逃してくれるわけじゃないんだから」
オカマ先生　「そりゃまあ、立場的にはね」
スイ　「でもあんまり根詰める？　と来るものも来ないっていうか」
キホ　「……なんか温度差違くない？」
スイ　「そんなことない思うけど」
リュウ　「おい……」
キホ　「したくないならハッキリ言えば良いじゃん。私ばっかり張り切っておかしくない？　言いだしっぺ私じゃないのに、なんで私だけマジみたいなの？　2人ともやる気ないなら言ってよ。私だってさ、別に好きでやってるわけじゃないし、やる気ない人たちとしたくないし」
リュウ　「待てよ。ずっと付き合ってきたじゃん。そんな言い方ねえんじゃねえの？」
キホ　「付き合ってきた？　嫌々ってこと？　私だけ本気だったってこと？」
リュウ　「そんなこと言ってねえじゃん……」
オカマ先生　「ちょおっと。もう、今からってときに……」
キホ　「帰って」

リュウ　「は？」
キホ　「みんな帰って」
スイ　「やだよ……」
キホ　「出てって」

リュウ、スイ、出ていく。オカマ先生も出ていく。

キホ　「……あー、あー、あ～、あ～！（客席に）実はわたしはUFOにも宇宙人にも興味がない。ガチじゃないのに喧嘩した。3人でバカやってたかっただけなのに喧嘩した。ぶっちゃけ宇宙人なんて来なくて良い。ルーフル、ルーフル、応答するな。宇宙人なんて来なくて良い。ずっとずっと来なくて良い」

キホ、俯く。

キホ　「宇宙人なんて、来なくて良い」

暗転。

4　明かりがつく。
屋上。
ルーフル、ルーフルと呪文を唱えながら、円を描くように回っているキホの姿。

キホ　「ルーフル、ルーフル、応答せよ。ルーフル、ルーフル……。つまんない。（空に）お前らのせいたから。いっそ連れてけ。殺せ。姿見せろ。一生来るな」

リュウ、スイ、屋上にやってくる。

スイ　「ルーフル、ルーフル、応答するな。宇宙人なんて来なくて良い。来なくて良い。ずっと、3人で、呼び出し続けるから。応答するな」
リュウ　「ルーフル、ルーフル、応答するな。オレ、全然、信じてねえし。信じてねえヤツのところになんか、来んな」
スイ　「ごめん私、ほんとはあんまり興味ないの。宇宙人よりロバートダウニージュニアのほうが会いたいもん。みんなといるのが楽しかっただけなの」
リュウ　「オレもだよバーカ、宇宙人なんてバーカ」
キホ　「私も本当は、宇宙人とか、どうでもいいの」
リュウ　「なんだよそれ」

キホ　「わかんないわよお」
スイ　「わたしたち、なんで召喚してんのよお」
キホ　「わかんなあい」
3人　「ルーフル、ルーフル、応答するな。宇宙人なんて来なくて良い。応答するな。来なくて良い」

3人、笑いあう。

スイ　「最初にこんなことはじめたの結局誰だっけ。さっきまでずっとキホだと思ってた」
リュウ　「何言ってんだよ、最初はお前だよ」
キホ　「最初はリュウでしょ」
リュウ　「オレじゃねえよ」
スイ　「あれえ？」
リュウ　「スイが宇宙人見たいって言いだしたんだろ」
スイ　「ええ、そんなこと言ってないもん」

3人、話しつづけている素振り。
オカマ先生登場。
オカマ先生にスポットライトが当たる。

オカマ先生　「（客席に）実は私は、宇宙人である」

終